

ルカの福音書 第18章 13節

「取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんで下さい。』」

顔を上げることもできない。いや、目を天にむけようもしない。向けられない。そればかりか、自分の胸までたたく。顔を上げ、勝ち誇るように胸をたたくシーンはよく見ることがある。しかし、ここでは、うつむき自分の胸をたたいている。その惨めな姿が、遠くに立つ。誰かの目にさえ触れたくないのであらうか。遠くに立ち、自分の拳で、自分の胸をたたく。それしかできない者がいる。

胸をたたき言う、「神さま。」目を伏せたまま、胸をたたきながら、できたことは、「神さま」と叫ぶばかりである。それでも呼べる名を知っていることは幸いである。ただ呼べる名を呼ぶ。崖っぷちで呼べる名を知っているのは救いである。叫びはこうだ、「こんな罪人の私をあわれんで下さい。」

取税人の地位で国を裏切り、同胞に背を向け、法外の税を民から取り立て、私腹を肥やしてきた自分の罪深さをさらけ出します。さらけだすしかありません。自分ではどうすることも出来ないのです。人生の絶壁に立ち、うずくまりしかありません。そこにあわれみの神がおられます。あわれんで下さい。

2023年3月21日